



教職大学院 Newsletter

No. 128

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科 since2008.4 2019.12.25

(提言) 新しい時代の新しい学び

福井大学連合教職大学院 教授/岐阜聖徳学園大学 教授

柘植 良雄

新学習指導要領の全面实施を目前にして、実務家
教員として一番気にかかることは、2年間の移行措
置の間に各学校の日々の授業がどのように変わった
のか、そして、教育実習で学生たちは、お世話にな
った学校でどんな授業を学んできたのかということ
です。教師を志す学生は、大学で「教科教育法」

(必修科目)を受講し、ここで学習指導要領の改訂
の経緯や趣旨、教科目標をはじめとして具体的な授
業展開のあり方などを学びます。そのため、たとえ
現場経験のない学生でも、実習先の学校が改訂の趣
旨を踏まえた実践をしているかどうかは分かりま
す。教育実習先の多くを岐阜県内の小中学校に依頼
している本学においては、学生の体験した授業が改
訂の趣旨に沿うものであったことを、教員OBの私
としては願うばかりです。私は、教員になって5回
目の改訂ですが、今回は、「資質・能力の育成」と
いう教育の目標論・学力論から見直され、またその
育成に向けて「主体的・対話的で深い学び」で実現
を図ろうとする教育の方法論までが明示された、こ
れまでにはなかった大きな改訂です。各学校では育
成したい資質・能力を明確にし、地域社会と願いを
連携・協働することや、教育課程を軸として学校教
育の改善・充実の好循環を生み出す「カリキュラ
ム・マネジメント」の実現が求められており、これ
まで以上に学校の主体性や校長のリーダーシップが
必要とされています。

去る8月に、県の教科研究部会(夏季研修会)
で、新学習指導要領にかかわって講演する機会をい
ただきました。内容は、「各学校で育成すべき資
質・能力を明確にする手順と方法」「生活科や総合
を中核としたカリキュラム・マネジメント」「主体
的・対話的で深い学びの授業」等です。それは、こ

のように改訂の趣旨を捉え、校長として来年度4月
に向け全職員でここまで準備しておきたいという具
体的なものです。これらの内容は、私自身がこの3
年間、学校改革等の実践と理論とを有機的に結ぶ連
合教職大学院を通して学ぶことができた最先端の実
践でもあることから、先生方の参加意欲には手応え
を感じました。参加された120名の先生方から、多
くの好意的な感想をいただきました。

- ・自分の授業の対話は「単なる言い合い」であつたし、「アクティブ・ラーニング」の捉え方も違っていた。
- ・「深い学び」に導く教師の具体的な発問や、授業の振り返り方をさっそく使ってみたい。
- ・この講演が対話的な学びであつたことに気づいた。このやり方を9月から授業でやってみたい。

内容

巻頭言 (1)	
夏期集中講座を振り返って (2)	
インターンシップ/木曜カンファレンス報告 (4)	
ミドルリーダー・マネジメントコース便り (6)	
11月 月間合同カンファレンス報告 (8)	
福井大学附属学校園公開研究会報告 (11)	
各地ラウンドテーブル参加報告(その1) (15)	
国際学会参加報告 (17)	
タイ王国校長等研修報告 (22)	
各地公開研究会案内 (24)	
2月ラウンドテーブル案内 (26)	
冬の入試説明会案内 (28)	
スケジュール (28)	

- ・「正解」だけを求める自分の授業を反省した。2学期早々に、全職員で Society5.0 に必要な資質・能力を考えたい。
- ・総合を核として、1教科でも教科横断的なカリキュラムを考え、マネジメントしてみたい。
- ・教科目標の「リード文」に視点をあてた学習指導要領の読み方が分かった。今回こそ解説書を熟読したい。

教員は企業に働く人とは違って、時代の移り変わりを感じてもこれを授業等にすぐ反映することは少なく、学習指導要領の改訂によってはじめて時代の変化を捉え、授業を変えています。それ故、新しい時代の教育に向けて、改訂の趣旨は学校職員全員が十分に共通理解しなければいけないものです。各教科等の学習指導要領解説の第一章には総説があり、ここに述べてある「改訂の経緯及び基本方針」「各教科等の改訂の趣旨及び要点」だけでは十分な理解は難しく、やはり中教審答申から読み解く校内研修が必要と考えます。講演に参加された先生方の感想にもあるように、県内の学校現場では、未だに学習指導要領が読めていないという実態があちこちで見られます。4月からの全面実施で、学校職員が心新たに自信を持ってスタートできるかどうかは、各学

校長を中心とした意図的な研修と、残り半年の実践にかかっています。

現在、岐阜県からは3名の院生がこの連合教職大学院で学んでおり、昨年度卒業した1名を加え4名の教員が協力し合い実践（話題）を提供して、地域の先生方との「学びの場」を作っています。これは、このラウンドテーブルに代表されるここでの「学び方」そのものを、なんとか岐阜県の教員研修に採り入れたいという院生の願いをきっかけに取り組みを始めたものです。今年度は羽島市の若手教員を対象として、6月と8月末の両日に福井大学の三田村彰先生、中島健先生を講師にお招きし、ラウンドテーブルを実施して、若い先生方に新しい学びを体験してもらいました。また、9月末には岐阜聖徳学園大学にて柳澤昌一先生を講師にお招きし、連合教職大学院についての学びの歴史や理論的な背景などを講演していただきました。そして、院生等による「実践研究報告会 2019」をラウンドテーブルで実施し、本学の教員や地域の先生方に新しい学びの良さを体感していただきました。これからも引き続き岐阜県の先生方の学びが、この連合教職大学院からの発信で少しでも改善されていくことを願っています。

夏期集中講座を振り返って

焦点化して省察することの必要性

ミドルリーダーコース2年/ 福井大学附属義務教育学校後期課程 坂部 宏明

私にとって2回目の夏の集中講座であった。昨年度の初めての夏期集中講座では、この教職大学院での学びとはどのようなものであるか手探りの状態の中で、これまでの教師人生の中で読んだことのないような専門書や先輩方の長期実践研究報告を読み込んで得た学びを自分の実践にどうつなげたらよいのか気が遠くなる思いで9日間が通り過ぎていったように記憶している。本年度も同じ9日間のサイクル

で夏期集中講座が行われるということを確認し、昨年度よりも少しは見通しや心の余裕を持って臨むことができたように思う。

Cycle 1 では、福井大学教育地域科学部附属中学校研究会著の「専門職として学び合う教師たち」第6巻を読み込む資料として選択した。その資料を選択した理由は、自分の勤務校の前身である附属中学校が、義務教育学校となって3年目を迎える現在において

も引き継がれている学校文化を紐解き、その価値を見いだすことができたと考えたからだ。資料を実際に読み込んでいくと興味深い内容が数多くあることに驚いた。特に強く印象に残っているのは、今の私の立場と同じ国語科教員であり、同じ学年主任であり、同じ研究企画（研究部）の立場でいらっしゃった高橋和代先生（現 福井市越廼中学校校長）の実践である。高橋先生の実践記録には、附属中学校に赴任してからの戸惑いや葛藤が赤裸々に書き記されており、私自身としても共感しながら読み進めることができた。また、高橋先生の実践から現在の義務教育学校でも脈々と受け継がれている研究のサイクルや授業における子どもたちの探究のサイクルについての意義を確認することができた。附属中学校時代から引き継がれている子どもたちの学びの筋から捉える授業実践レポートなどの省察的実践研究の意義や価値は、現在教職大学院で行われているものに相通じるものであると実感することができた。これらの様に、附属の先輩教員が大切にされてきた考え方を受け継ぎつつ、今後これからの教育現場に求められている新たな取り組みを附属の進化という形で創り上げていかななくてはならないという責任を重く感じたCycle 1であった。

Cycle 2では、ピーター・M・センゲ著の「学習する組織」の読み込みを行った。現在、学び続ける教師集団としての学校組織づくりがどの学校でも大きな課題となっている。そのような課題を解決するためのヒントとなる内容がこの著書から得ることができた。特に印象に残ったのは、組織の中で「共有ビジョン」を持って、そのビジョンに向かい組織全体が協働しながら取り組んでいくことである。福大附属義務教育学校全体で取り組んでいる「主題—探究—表現」型学習における「主題」を教員全体で共有することで、所属教員一人一人が必要感を持って研究に取り組むことにつながり、所属教員が自らの高まりや喜びを感じながら研究を進めていけるのではないだろうかと考えることができた。どんな組織でも起こっている温度差を埋めるためにも、組織に所属する教員全てがワクワクする「共有ビジョン」を構築して共有していく必要があると学ぶことができたCycle 2であった。

Cycle 3では、長期実践報告にむけて自分自身の実践をじっくりと振り返り捉え直す時間となった。教職大学院に入学して1年半、自分自身に与えられたコーディネーターとしての役割とその取り組みについて省察してきた。私自身が携わってきた役割とは以下の通りである。

- ①国語教科リーダーとして本校国語科教員7名をサポートするという役割
- ②福井実践国語の会（自主研究サークル）の事務局としての企画運営を行う役割
- ③学年主任としての学年スタッフを組織する役割
- ④本校研究企画（研究部）として学校全体の研究推進を図る役割

これらコーディネーターとして様々なコミュニティに関わってきたことを省察してきたのだが、長期実践報告をまとめていこうと見通しを立てた時に、つながりは見出すことはできるがストーリー性を持たせてまとめるにはあまりにも領域が広すぎると困惑していた。そのような私の思いをCycle 3の初日にセッショングループの中で語った。すると、教職大学院スタッフの風間先生に、義務教育学校の開校から現在に至るまでの変遷を語りまとめることができるのはあなたしかいない。これまでの義務教育学校として進んできた足跡や、前期課程と後期課程の融合のために生まれた葛藤や困難をぜひ読みたいと助言していただいた。その瞬間、私は方向性を定める決心をすることとなった。その後、すぐに勤務校に戻り、これまでの研究企画の資料をかき集め、これまでの省察でまとめたものを読み直し、現在から過去にさかのぼり自分たちが取り組んできたことをまとめていく1日となった。福井大学附属が義務教育学校になってからの2年半を振り返りまとめることは膨大な時間がかかる。少しでも詳細に書きまとめるためにも、時間を見つけて振り返りまとめていこうと強く思った。（そう書いておきながら、今現在も校務の忙しさでなかなかできていないが…）

教職大学院に入学して2回目の夏期集中講座では、長期実践報告に向けて附属のこれまでの歩みを紐解き、理論書から組織が成長するためのヒントを得て、今後の方向性を定めることができたとても素敵な時間だったと振り返ることができた。

インターンシップ/木曜カンファレンス報告

PISA を通して感じた大学院での学び

授業研究・教職専門性開発コース 1 年/福井市中藤小学校 藤本 紗奈

教職大学院に入学した頃は、インターンやカンファレンスと周りの環境が大きく変わり、ただただ毎日をこなすことに必死であった。これまで経験してきた大学の講義のように、誰かが何かを教えてくれることもなければ、導いてくれるということはなく、みんなで一つの課題に対して向き合い、考え、共有し、考察するという学習スタイルであったため、何をどうしていいかわからず、戸惑いを感じていた。だからこそ目の前に提示された課題に対し、なんでやらなきゃいけないのか、やっていて意味があるのかと感じ、木曜日に行われるカンファレンスに対して不信感を持っていた。

そんな考えが大きく変わったのは、木曜カンファレンスで行われた PISA 作りである。PISA 作りは今求められている学習(探求型学習)がどんなものであるかを、PISA 問題作りを通して考えようという趣旨のもと行われた。このとき M1 の 3 人が中心となって PISA の問題を作成し、先輩方にアドバイスをもらい改善するという流れで進んでいった。上記のような目的からこのような企画が始まっていたが、探求や協働ってなに、PISA を作って何の意味があるのと最初は感じており、企画に対してのやる気はなかった。そういった気持ちのなか、先輩の手助けもあり、テーマが外国人労働者問題に決まった。外国人労働者に関する資料を持ち寄って、検討しようということになりみんなが資料を持ち寄ったものの、外国人労働者問題がどんなものかわかっていなかったため、それぞれが持ち寄った資料は、外国人労働者問題に関する基本的な資料、課題や対策の資料、外国人労働者問題の今後に関する資料と非常にバラバラであった。そこで私たちはこの問題を俯瞰してから、外国人労働者問題についての問題を解いてもらおう解答者に、何を考えてほしいのか、そのためにはどんな情報が必要であるかという、問題の枠組みや軸を共有することで、資料の検討に進めるのでは

ないかと考えた。枠組みや軸を決めてからは資料検討がしやすく、非常に順調に進んでいった。しかしすぐに問題は発生した。作成者が考えてほしい外国人労働者問題を解く意義に解答者が時間内にたどり着くには、資料の質と量の両方を保障しなければならなかった。わかりやすすぎる資料は解答者の思考を奪うだけでなく問題の本質を失う。ながったらしい資料は時間のロスにつながるだけでなく、解答者のやる気をそぐ可能性があった。提示する量が限られている中で、問題の本質を保障する資料を選ぶのには悩まされた。M1 のみんなと何度も資料を読み込みそれぞれの考えたことをぶつけていく中で、ある程度満足いくものができた。実際に学部生の方々に解いていただき、自分たちの作った問題をもう一度考えたとき、たくさんの課題が見つかった。

PISA をやっていく中で自分の気持ちが徐々に変化していることに気づいた。はじめはこの企画に対して、意味なんてないとおもっていたが、自分は自分なりにこの活動に対して意味を見いだしていることに気が付いた。このとき私は、意味や価値は他人によって与えられるものではなく、自分の中で見いだすものであると感じた。だからこそいいものを作りたいと思い、真剣に PISA の活動に取り組むことができたのだと思う。PISA 活動を終えてから大学院での学びは大きく変化したと感じる。カンファレンスだけではなく、インターンにおいてもただ子どもと過ごすのではなく、自分で価値や意味を見いだすことによって、インターンにおいての目標ややりたいことが見つかり、大学院の学びに対し真剣に取り組めるようになったと思う。

またこの PISA を通して協働がどういうものかということがすこしだけ分かった気がする。私たちが集まれるのは毎週木曜日の PISA の企画のわずかな時間だけである。そのわずかな時間を有効に使うためには、集まる時間は絶対に話し合いの時間とし資

料の妥当性や新しいアイデアがないかについて話し合った。それぞれが自分の考えや自分の疑問点を素直に話すことができたおかげで企画が進んでいったと思う。私一人では到底取り組めるものではなかったし、M1を中心としたみんなと一緒に取り組んでくれたからこそできたと思う。PISAを終えてから時間がたったものの私はいまだに協働がどんなものかは説明できない。ただ協働には互いに信頼関係がないと成り立たないのではないかなと思う。PISAのとき自分の思っていることを素直に言うことができたのは、M1のみんなが、自分の考えを聞いてくれる、受け止めてくれると思っていたからである。自分の考えていることに対して絶対の自信をもって発信できる人は多くない。それぞれが迷いながら出した答えを受け入れることは、その人自身を受け入れるこ

とにつながると私は考えている。自分を受け入れてもらえる安心感がそこにあるからこそ素直に意見や考えをいうことができると思う。

12月に入りM1が企画側に回ることが増えてきた。企画をするにあたりそれぞれが考えていることがぶつかるときはたくさんあり、ピリピリするときもあるが、私はその場が心地よいと思うことがある。それはみんなが本気で企画に対し向き合い、本音でぶつかり合っている様子から、互いを尊重していることが読み取れるからだと思う。「協働」という難しい言葉の本質は、私が感じたことから始まるのではないかなと思う。これからM2となり大学院やインターン生としての在り方も問われる中で、他人を尊重することはこれからも大切にしていきたい。

省察という「自分磨き」へ

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井市至民中学校 黒田 苑

木曜カンファレンスとはインターンシップで分からないことを問いかける場なのだろうか。4月のはじめは木曜カンファレンスでそんなことを思っていた。入学してからしばらく、私の学びの振り返りは「院生とは何なのか」「インターンとは何なのか」という調子で、そのイメージを問い、手探りで学ぶことへのジレンマを感じていた。院生は先生のようにいつも授業をしているわけではなく、インターンが学部生の実習というわけでもないからだだった。

夏休みに入るにあたって、前期の至民中学校での授業実践や木曜カンファレンスの学びを整理したいと思った。その時に「自分が何を話題提供し、他の院生からどんな話を聴いたのか」、具体的に学びの記録を改善する必要性を感じた。自分が話した内容は細かく書き留めてはいなかった。他の院生が話した内容も、ざっくりとしかまとめておらず、自分の学ぶ姿勢を自問自答したくなった。

では、私自身は木曜カンファレンスにどのような意義を感じているのか。木曜カンファレンスは、学びの振り返りだけでなく、もっと語り合いが上手くできるようになる機会でもあると感じている。確かに、入学当初は院生やインターンというイメージに対する投げかけが多かった。しかしながら、授業実践を経て、投げかけたいことが具体的なものになってきた

と思う。

現在は、まず三つのことを意識して木曜カンファレンスに取り組んでいる。

一つ目は、話し手としてきちんと話題提供をすることだ。自分が話す回で何について話したいのか、聴き手と共有できるように準備する。自分が何を問題提起して、聴き手の考えから何を学びたいかを明らかにすることで学びの深まりを実感している。

二つ目に、聴き手として話し手の問題提起を捉えることだ。特に、最近では、語り手（院生や先生方）と自分の学びのつながりを探している。記録で問題提起を捉えたら、「次はどんなことを質問しようか」「私はどの方向から問題提起されたものを考えていこうか」「私の発言で話の方向が変わりはしないか」と思いめぐらしている。

三つ目に、「思い悩んで立ち止まること」から「やってみる」への転換だ。前期のPISA型の問題作成・Cycleを意識した授業づくり、後期の公教育における教科の意義を問う授業では、どこから課題をアプローチして考えを得ようか探究する活動が中心となる。授業の大半の時間が考える時間になったこともあれば、資料探しに没頭する時間や資料を読んでまとめるだけの時間になったこともある。一時間の終わりの学びの共有では、発表したり、先輩方の話を

聞いたりすることで、自分が「次は何ができるか」を考えることにつながる。

入学から半年が経ち、インターンや大学院の授業を通して、自分の特性も見えてきたと感じる。その自分の特性を肯定的に生かせるようにしたい。まだあと一年、考えて立ち止まってばかりいる自分が、実践に生かすチャンスはたくさんある。これから教職大学院での学びを報告する場面でも、多くの人と関わり合い、長期間向き合っていく課題と自己関連性を

明らかに深めていきたい。

教職大学院の手探りで学ぶことは、学部の授業の中で与えられたものから学びえることと異なっていた。「省察」という言葉にあるように、自分の上手くいったことだけでなく反省することから自分を高めていくことであると思う。次は記録を見ずに、きちんと共有したいことが相手に伝わる表現力を求めている。

ミドルリーダー・マネジメントコース便り

マネジメントコースだより

学校改革マネジメントコース2年/小浜市立小浜小学校 小坂 恵

教職大学院に入って2年が経とうとしています。

他の方もこれまで書かれていましたが、私も当初、カンファレンスが主体の教職大学院の学習形態に戸惑っていました。福井大学教職大学院のカンファレンスは、ファシリテーターの進行のもと、4、5人の小グループで互いの実践を語り合い、聴き合います。月1回のカンファレンスに参加しながら、いつになったらマネジメントに必要な知識やスキルを教えていただけるのだろうと待ちわびていました。学校で子どもたちに、「指示待ちではだめ。」などとうそぶいていましたが、私も「待ち」の姿勢の子どもと全く同じ状態だったわけです。

しかし、マネジメントコースで学んだ諸先輩方や大学院スタッフとお話しさせていただき、口を開けて待っていても、そこに知識やスキルが入ってくるわけではなく、そうか、自分が動かなければ何も得られないのだと遅まきながら気づきました。そう気づいてから、カンファレンスで他の方のお話を聴かせていただくときの自分の姿勢が変わりました。

カンファレンスの際、私が気をつけていることが2つあります。

一つは、傾聴するということです。カンファレンスでは、一人の持ち時間が4、50分ということもあり

ます。現場では考えられないくらいのゆったりした、ぜいたくな時間です。この間、話の最中につい口を挟みたくなります。特に、ストレートマスター（学部を卒業したばかりの院生）のような若い方が話し手のときには、自分の経験や意見を一方的に伝達したくなる衝動にかられます。しかし、若手は若手なりの考えを持って行動しているのです。その道筋をさえぎることなく、話し手の論理に沿って自分も擬似体験しなくては、相手の思考を共感的に理解できないのだと思うようになりました。また、自分と行動様式が異なっている、批判するのではなく、行動の意図を問いかけることによって、自分も問いかけられた人もより深く考えられるというよさを体感しているところです。

このような傾聴姿勢は、今後、より求められるものだと考えます。「ベテランだから…在校年数が長いから…あの人に。」だけではなく、職場の様々な年代、様々な経験年数、様々な職種の人の声を聴き、知恵を結集して、課題に向かっていく学校をめざすために、聴くことの重要性はより高まるものと確信しています。

もう一つは、逆説的になりますが、話し手の論理と別の目を持って実践を聴くことです。話し手の情熱

と行動力をリスペクトしつつ、かかった時間や予算、かかわったメンバー等について聞き取るようにしています。実現のための環境、実現に至った条件を分析することで、自校に生かせる実践のヒントが得られるのではないかと考えています。私は日々、帰宅後、冷蔵庫を開け、限られた材料と時計を横目に「さて、どう晩ご飯を作ろうか。」と思いつめがらしているわけですが、学校も規模こそ違え、決まった予算と時間の中で最大限おいしい料理（教育）を提供できるように求められている場だと思います。（もちろん、規模は全く違います。）より多くの事例にふれることで、自

分の実践のレパトリー（工夫）も増えると考えます。今後も他校の優れた工夫を聴かせていただけるのを楽しみにしています。

さて、学校現場と大学院を行き来し、失敗しながら得た学習姿勢。答えを待つのではなく、自ら仲間とともに動き、納得できる解をつくり出せる人となるよう、残りのカンファレンスの時間を味わい尽くしたい、そして、ここで得られたご縁を今後も大切にしたいと思う今日このごろです。今後どうぞよろしくお願い致します。

学校改革マネジメントコース2年目にあたり

学校改革マネジメントコース2年/越前市神山小学校 室谷 知徳

今からちょうど2年前の今頃、当時の学校長から「教職大学院で学んでこないか」と背中を押され、大学生活を満喫した懐かしの福井大学で再び学び始める機会を頂いた。教職大学院進学と合わせて、教務主任・研究主任を命じられた。これまでと職種が一転したかのように、勤務時間の大半をパソコンの前で過ごし、文書に目を通し続ける日々が続き、子供たちと接する期間は大幅に減少した。それまでは、一学級担任、あるいは一学年主任として、目の前の児童・生徒に目線を当て、狭い視野でしか教育を行っていなかった自分がいた。しかし、この時から学校全体、更には家庭・地域全体を見渡し、全教職員の表情を伺い、会話を交わし、アンテナを高くすることで、全校児童や全教職員の情報を収集し、掌握する立場に置かれた。見回さなければならぬ視野が360度に広がったのと同時に、学校全体に影響を及ぼすような責任が重くのしかかってくるが増えた。さらには、校長・教頭と話をする時間も増え、保護者や地域の方々との接点も増えてきた。こうした状況だからこそ、「学校改革マネジメントコース」での学びを発揮するにはもってこいの状況だと感じる事ができた。

さて、この教職大学院での学びも1年と9ヶ月が過ぎようとしているが、自分自身はどれだけ成長したのかと振り返ってみると、甚だ恥ずかしいばかりである。これまでの合同カンファレンスやラウンドテーブル等を通して、多種多様な院生によるグループ編成のお陰で、若い先生方のエネルギーや、ベテランの先生方の実践の豊かさを感じる事ができた。

教職大学院進学にあたり、越前市教育委員会教育長から言われた、「ネットワークを広げてきなさい」という目的は随分果たせたと感じている。と同時に、日頃から実践・省察・記録のサイクルが自分の中に定着してきたと感じている。また、自分自身の振り返りだけでなく、勤務校の強みと弱みにも目を向けられるようになってきた。豊かなコミュニティの形成、専門職として学び合う教師のコミュニティの実現による「前例踏襲」「現状維持で良かれ主義」からの脱却が、現勤務校の喫緊の課題であると感じた。幸いなことに、以前に比べ、非常に落ち着いた学校になり、教職員の仲も良いので、単なる「仲良し集団」から脱却し、学校改革に向けて「チーム学校」を立ち上げるチャンスであると感じている。

2年次である2019年度も、残りわずかとなってきた。2年目ということで、年間の見通しは利いているものの、日々の業務に追われ、新たな取組を進める余裕が正直なかった。長期実践研究報告など、まだ先の話だと思っていたのに、夏季休業が終わり、間もなく2学期も終わろうとしている。教職大学院最後の11月の合同カンファレンスで頂いた「執筆スケジュール」に目を通し、大変危機感を抱いているのが本音である。これまでの実践を長期にわたって跡づけ問い返すための自分なりの記録・表現の枠組みを構成し、長期実践研究報告作成を通して、これまでの2年間の学びを振り返ると同時に、残りの教員人生においても2年間の学びを生かしていきたいと思っている。

11 月 月間合同カンファレンス報告

他校から学び、自校を振り返る

ミドルリーダー養成コース 2 年/高浜町立青郷小学校 松本 亜耶子

教職大学院での 2 年目が、あと少しで終わろうとしている。しかし、ここからの 2 ヶ月、3 ヶ月がとても長いものになるだろうことは、想像できる。本当に長期実践報告が仕上がるのだろうか。不安な気持ちはあるものの、日々の業務に追われてしまっている自分がある。「冬来たりなば、春遠からじ」と思い、まともに向かいたい。

11 月カンファレンスでは、「他校に学ぶ」をテーマに意見交換が行われた。

最初に福井大学教育学部附属幼稚園上田先生からの話題提供があった。他校から学ぶ方法として、①他園②公開保育③異校種について挙げておられた。①の他園訪問では、自分の園ですぐに使えるネタや工夫を見つけることができる。②の公開保育では、自園の強みや弱みに気づき、改善点について考えることができる。そして、当たり前と思って行っていることを捉え直し振り返る。③の異校種から学ぶでは、遊びの見取りを深めることをされていた。附属学園合同研究会で、幼稚園の遊びの見取りを報告し、小中の先生に伝えている。遊び→社創→学 P へとつながる遊びの考え方を知ってもらう。年 3 回、公開保育をされていると聞いて、準備等大変であることが想像されるが、そうすることで自分たちが学ぶ機会も増えるのだろうと感じた。

カンファレンスという場も、他校から学ぶ機会の一つである。まず、県内の中学校でインターンとして活動をされている先生の話聞いた。現在の勤務校は、県外から来られた先生から見ると、最初は驚くことが多かったそうだ。生徒総会である質問が出た時に、生徒会長が、「そのことについては、先生に確認しておきます」と発言した。その発言を聞いて悲しくなられたそうだ。本来、生徒の自治で行っている生徒会活動で、このような発言が出たからである。この先生は、最初に感じた違和感を忘れずに持っておられた。それがとても大切なことだと感じた。自分が経験していない文化のある勤務校で、様々なことに気づき、今までの自分の経験と比較し吟味しながら日々の活動をされているのだと感じた。

次に、気がかりな児童のいる学校を訪問し、教育相談や授業参観を行うことを業務とされている先生の話聞いた。訪問依頼があったある学校は、各学年 3 クラスずつの学校で、ある学年の 2 組だけで多くの児童の観察希望があった。その差に先生は違和感をもたれた。観察を行った後、相談の時には 2 組の担任の先生だけでなく、他クラスの担任の先生にも入ってもらった。そこで、気がかりな児童についての情報を学年全体で共有し、その子たちのいいところや、行動についてたくさんの情報を得られた。担任の先生も、気持ちが少し楽になったそうだ。この経験から先生が気付かれたことは、他校から学ぶことも大切だが、自分の学校の中から学び、学校の中で見合う、学び合う文化を創ることも大切だということだった。例えば、同じ学年集団の中で情報を共有したり、ベテランの先生が若手の先生に教科指導等を伝えたりすることだ。そうすることで、お互いの弱みを見せ合える関係になるのではないかと思った。私の勤務校でも、毎日終礼という時間を持っている。各クラスの現状を伝え合う場になっている。

私が報告したことは、前日にあった後期訪問の授業についてであった。今年の 2 月と 6 月に奈良女子大学附属小学校の学習研究発表会に参加させてもらった。そこで、主体的・対話的で深い学びについて実感を持って少し理解することができた。附属小では、自分の言葉を使って自分のことを話す時間を確保されていた。それがよく表れていたのが朝の会だった。自分の言葉で話し、周りの子はその言葉を丁寧に聞く。質問や感想があったら反応する。生き生きと自分の言葉で語る子どもたちを見て、圧倒された。授業でも、子どもたちが発言する場面が多く設定されていた。体育では、子どもたちに活動をさせたあと、子どもが司会となり振り返りやアドバイスをしあっていた。国語の物語では、子どもたちが書いた初発の感想を基に気になった点や質問したいことを尋ね合うスタイルで授業が展開されていた。グループの先生からは、以下の意見があった。気になる子は話を聞けなだけでなく、自分の気持ちを表現できない、話せない

いことが多い。自分の言葉を使って話す時間を低学年のうちから確保して、存分に語る機会を与えることが大切だ。また、何もネタがなく話すことは難しい子もいる。見せたいものを準備したり、お題を与えたりして場を設定することもいいかもしれない。

最後に全体を通して意見交換を行った。他校から学ぶことは、自校のことを相対化することだ。ここの学びを持ち帰り、他校という鏡を通して、自分たちの学校を振り返る機会としていきたい。

幼小中が連携することの大切さ

ミドルリーダー養成コース2年/福井市中藤小学校 河上 大機

先日、福井大学教育学部附属幼稚園の幼児教育研究集会に参加しました。参加したきっかけは、研究主題「つながりが育む学びの深まり ～試す、工夫する、つくり出す遊びを求めて～」に興味をもったからです。また、「試行錯誤しながら学びを深めていくこと」や「実践と省察を繰り返し最善の方法を探ること」など、自分が長期実践研究報告の柱にしようとしている「プログラミング的思考」について、何か見出せるかもしれないという期待もありました。

さて、幼児ののびのびとした主体的な活動を実際に見て真っ先に考えたことは、「せっかく幼稚園や保育園で培われてきた探究心や主体性を、小学校の先生が制限してしまうのではないか。」という心配でした。そんな複雑な思いを抱いていた中で、11月の合同カンファレンス。同じグループになったのは、なんと、福井大学教育学部附属幼稚園の研究主任、上田晴之先生でした。そこで私は自分の思いを伝えました。教職大学院のカンファレンスでは、なぜか自分の思いをストレートに話せる、そんな雰囲気があるので不思議です。話し合いの中で、私が一番重要だと思ったのは、「幼小中連携」の大切さでした。

幼児は小学校に入学したとたんに、「教科」としてのカリキュラム（授業）が入ってきたり、時間を守ること（チャイム）や持ち物や文房具の細かい指定があったりと、がらりと環境が変わります。いわゆる「義務教育」という枠組みの中に、幼児が突然、放り込まれるような感じがします。その結果、それに不応を起す子が出てきたり、小学校の教員がそのことを保護者に知らせると、「保育園の時はそんなことを先生に言われなかったのに、小学校の先生に突然言われた。」などと、今度は小学校の教員が保護者に不信感を抱かれたりすることもあります。

小学校入学の段階において、幼稚園や保育園の先生と密に連絡を取り合い、子ども一人ひとりの特徴や性格などについてしっかりと理解しておくことや、幼児教育で培ってきた主体性や自主性を、小学校の

教育活動のどの部分で、どのように生かし、伸ばしていくことができるのかを考えていくことは、小学校の教員の大きな使命だとも思いました。

また、私が中学校で担任したK君のことも思い出します。K君は小学校の時はとても真面目で優秀だったのに、中学校に入学したとたんに言葉遣いが乱暴になり、素行不良になりました。当時、私は若かったこともあり、心の中で、「小学校の先生がKを甘やかしすぎたのではないか。」とか「小学校で、ルールやマナーをきちんと教えてくれたのかな。」などと、あたかも小学校側に責任があるのではないかという考えを抱いたこともありました。しかし、この間違いに気づいたのは、小学校の時、K君の担任だったN先生のつぶやきでした。N先生は「なぜあんなに素直な子が中学校でぐれてしまったのか。」と嘆き、さらに「彼が小学生の時は、体育の授業一つにしても『前へ倣え！』など、言われなくてもきちんと列を整えて並ばせてくれたのに…。中学校の先生が、甘やかしてしまうのか…？」と、私と正反対のことを言ったのです。

これは、「学習する組織」（ピーター・M・センゲ著）に出てくる「ビール工場の物語」とよく似ています。小売業者、卸売業者、ビール工場の三つの組織がその職務を忠実に遂行しているのに、企業全体が経営破綻を引き起こしてしまうという、誰も悪くないのに組織が失敗する例です。K君のことを人のせいにする前に、「Kとしっかりと話をしたのか？」「Kの家庭環境に変化はなかったのか？」「小学校の先生にKのことを詳しく聞いたのか？」「自分の職場（組織）で、何かできることはなかったのか？」当時、幼小中連携がほとんどされておらず、また働きかけることもせず、今振り返ると悔やまれることばかりです。

子どもたちのために、自分や相手の職場を思いやり、異校種間で情報を共有したり相談したりするなど、「幼小中連携」の大切さを改めて実感したカンファレンスでした。

再び原点に立ち返る

—最後の合同カンファレンスを通して—

授業研究・教職専門性開発コース 3 年/福井市中藤小学校 服部 哲也

新元号「令和」がはじまり、はや7か月。あと1か月で令和元年が終わろうとしている中、今年度最後の合同カンファレンスが行われた。そして、私にとっては大学院最後の合同カンファレンスである。振り返ってみると、3年間という期間は長かったような短かったような不思議な感覚だ。最後の合同カンファレンスということで、少し今までの合同カンファレンスについて振り返りながら、11月16日に行われた合同カンファレンスについても書き留めていこうと思う。

大学院入学当初の私は理系学部から進学してきたこともあり、右も左も分からない状況で、現職の先生方とテーブルを囲んで話すことにプレッシャーや緊張感を感じていた。緊張からか上手く話すことができなかった上、話す様子からも自信がない様子が伺えたと思う。また、経験豊富な現職の先生方のお話が私にとっては、とても難しく感じたのを今でも鮮明に覚えている。しかし、合同カンファレンスを重ねるたび、私なりに現職の先生方と実践を共有していく意味を感じ始めた。このように感じられるようになったのは、次の3つの理由があげられる。

1つ目は、どんなに小さな気づきや発見、学びの話でも私たちに寄り添いながら、丁寧に、いつも真剣に聴いてくださり、それでいて1人の教員という立場を尊重するという姿勢で助言やコメントをしてくださる先生方に会うことができたからだ。

2つ目は、視点や立場は違っていても、同じように悩みを抱えた先生方がこんなにもたくさんいるという安心感をもてたからだ。

そして3つ目は、何度話し合いをしても、話が尽きることのない合同カンファレンスに楽しさを見出したからだ。

私が実践を語ると、現職の先生方は私たちと同じ視点に立ち返り私たちと同時期の頃の実践を語ってくれたり、今の立場で1人の教員を育成していこうという姿勢で助言やコメントをしてくれたりといつも一緒に考えてくれた。ミドルリーダーの先生方が実践を語るとき、私たちに分かりやすい言葉にしながら、それでいて私たちの今後の見通しやこれから先を見越して、実践を語ってくれた。マネジメントの先生方の実践からは学校組織について聴き、私自身

には今のインターンという立場でどのように動いていけばよいのか、というシステム思考的な考え方を学ぶことができた。先生方が私たちに常に寄り添ってくれるという安心感と同じ悩みを共有できるという安心感の2つの安心感から、次第にプレッシャーや緊張感が薄れ、共有することの楽しさを感じることができた。そして、共有することの楽しさを知ったからこそ話がやむことがなく、まだ話足りないという感覚が身に付いた。それは共有するだけにとどまらない。2度、3度と同じグループで話すことを繰り返していくうちに、先生方から私自身の変容を追っていただいただけでなく、学んできたことの意味付け、定義づけをしていただいた。私は褒められているようでとても嬉しくなり、さらに学ぶ意欲がわきあがり、「また明日から頑張ろう!」という気持ちになった。私は実践を語り、聴き、共有していくことにこんなにも夢中になり、学んでいく楽しさを見出していたのだ。

さて、11月の合同カンファレンスでは、「他校の研究から学び、他校の研究を支える」というテーマで話し合いが行われた。私は11月9日に行われた早稲田教育実践研究フォーラムについての経験を語った。早稲田教育実践研究フォーラムを築き上げるまでについて学んだこと、私自身の実践に関係が深いことについて話した。

それらの研究会を踏まえて、「自分自身の実践の挑戦を語る」というテーマで午後のセッションは行われた。長期実践研究報告書の構成を考えていくとてもいい機会だった。午前中での話し合った他校の研究会での学びが自分自身の実践を支えているということ、また、他校の研究会がスクールリーダーの先生方やマネジメントの先生方にとっては、コミュニティや研究会を支えていることに気づくことができ、とても有意義な時間になった。そして、何より長期実践研究報告書の構成を考える点においては、タイトルにもあるように改めて「原点に立ち返る」ことができ、今までの取組を再びとらえ直すことができたと思う。

私は教職大学院に入学する前は理系学部だったことから、「理科教育に力を入れていきたい」という思いが、教職大学院でのスタートだった。そして、月日

が経ち、子どもと共に日々を過ごしていく中で、いつの間にか「子どもに寄り添いたい」という気持ちに変わっていた。気持ちの変容から「子どもの行動の背景や原因を考え、子どもの気持ちや思考の流れを理解すること」がいつしか目標になっていた。このような私自身の変容を語っていき構成を考えていると、たくさんのコメントや助言をいただくことができた。

「専門性と子どもの見取りをどのようにつなげていくかを考えるとよいのでは?」「専門性から途中離れていて、もったいない!」「専門性を学んできた人が教職大学院に来るから、その専門性がいかされていくのではないか」とのご意見だった。決して理科教育

について忘れていたわけではないが、確かに途中から薄れているように思う。そんな私自身の専門のよさを出してほしいという気持ちが感じられた。理科の授業実践と子どもたちの見取りをぜひ生かして長期実践研究報告書を書いていきたいと気持ちになった。

最後に、今回を含め今までのカンファレンスを振り返り、たくさんの先生方との関わりが常に私自身の学びを支えてくださったように思う。長期実践報告書は先生方からいただいたコメントや助言からも踏まえて考えていきたい。

福井大学附属学校園公開研究会報告

第29回 幼児教育研究集会を終えて

福井大学教育学部附属幼稚園

上田 晴之

11月9日(土)に福井大学教育学部附属幼稚園で、第29回幼児教育研究集会が行われた。県内外から200名以上の幼児教育関係者、小中学校関係者など教員や保育士、保育教諭が集まった。当日は天候にも恵まれ、園庭ではどんぐりコンサート、木や築山を使ったサーキット、泥団子作り、サッカー遊び、色水遊び、砂遊び、光遊びなど、自然物や環境を大いに使いながら遊びが展開された。また室内でも、ドングリゴマやドングリ転がし遊び、ままごとなどのごっこ遊びなど、自分達の思いを十分に出しながらそれぞれの場所で遊びに没頭する姿を見ることができた。

本園では、「つながりが育む学びの深まり～試す、工夫する、つくり出す遊びを求めて～」という研究テーマのもと2年間実践を進めてきた。子ども達が様々なモノやコト、人と出会い、遊びを通して多様なことに気付き、そのものを好きになっていくプロセスを事例を通して追い続けている。また、「試す」遊びを中心に、構想したり、構築したりしながら工夫をすること、さらに工夫したことを使って、発想や思いと絡めながら新たな遊びをつくり出していくこと、幼児期の遊びを通して内からわき上がる思いの揺れ動き(やってみよう→どうしよう?→こうしてみようかな?→うまくできないな…→次はこうしよう!)が遊びのプロセスとして確認でき

た。遊びが発展していくことで附属義務教育学校の「発意→構想→構築→遂行→省察」のサイクルへとつながる。幼小接続についても実感することができた。幼児も教師も遊びを通し、次への見通しを持ちながら、発意していけるような、環境構成の工夫や、遊びの刺激が大切だと感じている。

年齢別分科会では、福井県幼児教育センターとの連携により、幼児教育アドバイザー、園内リーダー養成研修として、本園の研究集会が活用されており、幼児教育アドバイザーの先生方がそれぞれのグループのファシリテーターとなり話し合いが展開された。試したくなる種(環境)を用意しておく大切さ、リスクとどう向き合っていくのか(リスクとハザードの違い)、教師の連携の大切さ・フットワークの軽さの重要性などについて活発に協議された。

リレーシンポジウムでは、白梅学院大学 無藤隆氏、東京大学 秋田喜代美氏、福井大学 松木健一氏にシンポジストとして、福井大学連合教職大学院 岸野麻衣氏にコーディネーターとして登壇していただき、年3回のリレーシンポジウムの最終回となった。当日の保育をもとに「試す」遊びの前に、幼児の心の動きが大切であり、それを見取る教師の力量の重要性、また多様に遊びを展開する重要性を考えた。「芽生え」の扱いの難しさ、拾わないと消えていき、拾いすぎると広がり過ぎる。どのような必然

性を持たせるのか、どのように次への見通しをもつのかについても深めていった。国の動向、OECD 2030について触れながら、幼児期は子ども達のしたいことが十分できるように保証していくこと、幼児の主体性と教師の意図性のバランスが重要で、教師の意図、環境の提供が重要であることも再確認した。

後日、保護者向けにも実践研究発表会を行い、大

変好評であった。

幼児らが遊びに没頭し、その中で多様に気づき、深い学びにつながっていくためには、どのような出会いを仕組んでいくのか、子ども達と一緒にどのような出会いを作っていくのか。子ども達が豊かに遊び、学ぶ姿を核にしてこれからも実践し続けていきたいと考える。

附属幼稚園公開保育に参加して

福井市立鶺鴒東部幼稚園

西東 真樹

今年度、福井市立幼稚園からの研究協力者として、福井大学教育学部附属幼稚園の公開保育に3度参加させていただきました。同じ園を1年間に3度も訪問し、他園の幼児の様子を継続して見せていただいたり、研究会で話し合ったりするのは初めてのことで、貴重な経験となりました。また、研究会のグループ討議でのファシリテーター役は荷が重いと感じていたのですが、附属幼稚園の先生方の保育、参加者の先生方の熱心な意見交換からいろいろなことを学ばせていただきました。

参観を通して、ある男児に出会いました。6月、その男児はなかよし広場で友達とサッカー遊びを楽しんでいました。とても生き生きと、しかし自分一人で次々とルールを作っては変えて遊ぶ様子と、男児のアイデアを「うん、うん。」「そうしたいんだね。」と大切に先生方の姿が印象的でした。自分は幼児に寄り添い『待つ』ことができているだろうか…と日頃の保育を反省しました。10月、男児は気の合う友達と2人で、園庭のクヌギの木の下で『どんぐりハウス』でレストランごっこをして遊んでいました。どんぐりや木の葉がたっぷり入ったスーパの鍋を大事そうにかき混ぜながら、年下の幼児に「お待ちくださいね。」「こちらですよ。」と優しく声をかける男児。相手の顔を見ながら会話をしている様子を見て、こちらまで嬉しくなりました。そして11月、男児は「ねえ、一緒に遊ぼう。」「ごめんね。」「さっ

きは上手いかなかったから、こうしてみよう。」と何人もの友達に声をかけていました。女児が発表ごっこをするステージの隣でピザ屋さんになり、女児たちの歌に拍手を送りながら、歌と歌の間のタイミングを待って「こちらでピザが食べられますよ!」とお客さんに声をかけて伝える姿も見られました。嬉しそうな笑顔、真剣に考え込む顔、涙ぐむ顔。1時間半ほどの遊びの中で男児の様々な思いが伝わってきました。

3回の参観で、男児が友達のいろいろな考え方に触れたり協力したりしながらだんだん友達と深くつながって遊ぶようになっていった様子を見ることができました。このような姿が見られたのは、いつも先生方が男児の近くや離れた場所で見守っておられたことや、子どもたちが全身でかかわって遊べる四季折々の環境構成がされていたからだと思います。

私は、附属幼稚園での教育実習でご指導くださったM先生に憧れて、今に至っています。研究会で、当時と変わらず子どもたちや先生方を支えておられるM先生の優しい笑顔を見ることができ、初心に返り、明日からの保育への活力をいただきました。

年長児はいよいよ3年間の園生活のまとめの時期に入ります。附属の先生方のように、子どもたちが自信をもって生き生きと過ごせるように援助していきたいと思っています。先生方、本当にありがとうございました。

附属特別支援学校 公開研究会について

福井大学連合教職大学院 准教授/福井大学教育学部附属特別支援学校

常廣 和美

今回の公開研究会は、例年のものとは少し異なる趣旨で開催された。それは令和2年度に開催される

「第59回 全国学校体育研究大会 福井大会 特別支援学校部会」のプレ大会を兼ねていたという点

である。「学体研」と呼ばれるこの研究会はスポーツ庁が主催するものである。オリンピック・パラリンピックが日本で開催され、新学習指導要領が中学校で全面実施となる年に学体研が行われるのは、本校にとって重要な意味があると思う。

附属特別支援学校では新たなテーマである「わかる・できるを実感し、楽しさや喜びにつながる『運動』の授業づくり」で、今年度の研究に取り組んできた。昨年度までは学部別の授業づくりを中心に3年間取り組んできたが、その間に新学習指導要領が告示され、どの特別支援学校においても授業づくりの視点や授業研究会の持ち方が大きく変わってきた。過去の研究では、本校の「生活教育」である子どもたちの生活を主体とした「教科・領域を合わせた指導」の中で、子どもの内面にあるストーリーを大事にすることや学びのサイクルが繰り返されるしかけ等を取り上げてきた。このような流れをふまえ、学体研での役割も相まって今年度からは「運動」の活動で授業づくりを進めることになったのである。

本校の「生活教育」は縦割り集団や子ども同士の関わりを重視し、生活中心で子ども主体とする「教科・領域合わせた指導」である。そこで「体育」という「教科」での授業となるとこれまでの取り組みとは一線を画すものになることが予想された。研究に取り掛かった頃は「体育」という教科としての概

念に教師自身がとらわれ過ぎてしまったこともあった。助言者から「子どものストーリーに沿い、子どもに必然性が感じられる授業にしては?」「体育の中でも探究のサイクルが回せるのでは?」といったようなお話をいただいた。そこで、これまでの積み上げを生かし、本校独自の「運動」の意義を捉え直すことにした。教師自身が「体育の既成概念」から一歩踏み出し、「合わせた指導」である「運動」で子どもにどんな資質・能力を育むのか、必要な指導内容や子ども主体となるようなしかけはどうするかといった授業づくりを、教師が協働して進めていくことが不可欠であった。

今回の研究会では小学部・中学部の運動の授業を公開し、研究会では参加された方と共に子どもの姿から授業を語ることができた。高等部は主にポスターセッションを通して参加者と意見を交わした。課題として、運動量の確保や家庭等との連携、個別の支援などが挙げられた。これらの課題に向き合い、今後も教師が協働し、子どもの姿から学びながら授業実践を積み重ねていき、来年度の学体研で再び各方面の先生方と授業を共有し、子どもの姿から授業を語り合いたい。最後に、本研究会に関わってくださった方々に深く感謝申し上げるとともに、今後ともご指導をいただきながら授業研究を進めていきたいと思う。

仲間との関係のなかで楽しみながら身体を動かす

福井大学連合教職大学院 特命助教 矢内 琴江

2019年11月15日に、福井大学附属特別支援学校の公開研究会に参加しました。私自身は、この4月に福井大学に着任し、自分自身の専門分野がジェンダー論と社会教育ということもあり、特別支援学校の公開研究会に参加するのは初めてでした。今回の公開研究会は、第59回全国学校体育研究大会福井プレ大会でもありました。全体研究テーマは「わかる・できるを実感し、楽しさや喜びにつながる『運動』の授業づくり」でした。ここでは、参観した体育の授業で、特に印象に残っている2つの場面を取り上げます。

1つ目は、小学部の体育の授業のなかで見た、子どもたちの自分で決める姿です。自分はどのゲームをしたいのか、どのイラストをめがけてボールを投げたいのか等、先生たちとのやりとりをしながら、子どもが自分で決める場面がたくさんありました。

また、授業の中では、友達のことを思って自分のことを決めるという姿もありました。ある子は、最初はストラックアウトを選びましたが、的当てを選んだ子が1人になってしまったので、先生の声かけもあり、ストラックアウトに変えました。その子は、友達のことを何度も応援していました。友達も、そこに答えるようにしっかり体を動かしていました。このような子どもの自分で決めることの積み重ねは、子どもの主体性が発揮される学びを形成しているように思いました。しかも、この自己決定とは、単に自分のことだけを考えたり、自分一人で決めたりすることではなく、むしろ仲間との関係のなかで自分はどの行動したいかを、周りの人たちと一緒に考えることではないかと思いました。

2つ目は、中学部の島渡りゲームで見た、仲間に声をかけあう姿についてです。マットやミニ平舞台

を島に見立てて、床に落ちないようにグループで一周します。6人グループと、4人グループで取り組んでいました。6人のグループは、何度も島から落ちながらも、メンバーがお互いのことをおんぶしたり、声をかけ合いながら、マットの移動を工夫して進んでいきました。何とか進みましたが、時間切れのために、2周はできませんでした。けれども、4人グループの子たちは、2周目に入ることになり、その時、どうやったら上手に進めるか、6人グループのメンバーたちは、自分たちがやってみたことから掴んだコツを大きな声で伝えてあげたりして、4人グループが島をわたるサポートをしました。それ

まで各グループでの活動になっていたのが、全体での活動になっていました。それは、それぞれのグループの中だけの協働ではなく、自分たちが苦労した経験から掴んだ知を、別のグループにも伝え、教わったグループがチャレンジしてみる、グループ間の協働的な学びの姿でした。

授業参観、またここでは書けなかったグループ協議、全体会などを通して、子どもたちが楽しみながら、仲間との関係のなかで、目いっぱい体を動かし、自分自身を、体まるごと育む学びのあり方について考える一日となりました。

第2回教育研究集会

福井大学連合教職大学院 准教授/福井大学教育学部附属義務教育学校 柳 博恵

本校は平成29年に附属義務教育学校となり今年で3年目を迎える。11月22日（金）に義務教育学校になって、2回目の教育研究集会を開催することができた。県内外、海外から500名を超える参観者が来校された。盛会のうちに所期の目的を果たすことができたことに感謝の気持ちでいっぱいである。

研究主題「自律的な学びへのイノベーション／探究するコミュニティを培う」を設定し、これからの未来社会につながる義務教育課程におけるカリキュラムの在り方や、そこで培われる資質・能力の明確化について研究を展開してきた。その具体的な焦点として、今年度は二年次研究副題「学びのつながりを紡ぎ、社会を創る力をとらえる」を掲げ、教員一同総力を挙げて、実践研究に取り組み、研究の成果を発表した。

今年度は、午前の部最初に、オリエンテーションとして、本校の研究や授業の見方、分科会についてなどを説明する時間を設定した。その後、前期課程の児童発表では、1年生「なかよしプロジェクト～学校をもっとすきになろう～」のもと、先生にインタビューして分かったことや観察したことをポスターにまとめ発表した。参観者にインタビューを積極的に行い、初対面の方と楽しそうに会話をし、自信を持って活動していた子どもの姿が印象的だった。

2年生は「1年生を笑顔にしようプロジェクト」で、2年間の歩みと、その中で一番思い出に残っている活動について発表した。参観者から「君たちの発表で僕が笑顔になりましたよ。ありがとうね。」と声をかけられると、子どもたちのとっても嬉しそ

うな顔と喜んでいる表情をとらえることができた。

6年生は「未来を創るまちづくりプロジェクト」で探究してきた学びを参観者と語り合い、物怖じせず、自分たち思いを伝えることができていた。堂々とした対応に参観者も大変感心されていた。

後期課程の生徒発表では、各学年の学年プロジェクト、生徒会、音楽委員会、FLIA（生徒による自主活動組織）、シンガポール研修などのポスターセッションを行った。学校生活の様々な場面で進められているプロジェクト型学習の歩みを発表することができた。

参観してくださった方からの質問には、子どもたちは自分の言葉でわかりやすく伝える姿が見られた。

そして、前期課程と後期課程合わせて授業を19公開した。探究サイクル「発意－構想－構築－遂行・表現－省察」や研究副題を意識した授業をデザインした。子どもたちの学びの姿をもとに、分科会では、各教科で授業実践を振り返り、限られた時間ではあったが、参観された方々と中身の濃い話し合いの時間を共有できた。

午後の全体会では、東京大学大学院の秋田喜代美先生、東京大学高大接続研究開発センターの白水始先生、福井大学教職大学院の木村優先生、本校統括研究主任の柳博恵によるシンポジウムを行った。

「協働探究サイクルが生み出す子どもの学びをとらえる～全教科・領域で培う資質・能力～」のテーマに掲げ、「21世紀を生き抜くための資質・能力とは？」「資質・能力を評価するとはどういうことなのか？」全教科・領域における9年間の協働探究を

通して、どのような資質・能力を引き出すのかを子どもの学びの姿からとらえ、これからの学校教育の在り方や使命について参観者の方々と一緒に考える機会をいただいた。

教育研究集会の1日は分刻みの忙しさではあったが、子どもの学びの姿をとらえて、たくさんの方と語り合えたことに実り多い研究集会となったと実感する。

「平凡な教師は言って聞かせる、よい教師は説明する、優秀な教師はやって見せる、しかし、最高の教師は子どもの心に火をつける（ウィリアム・ウォードの言葉より）」私は、子どもの心に火をつけることができる授業づくりに力を注ぎたい。日々の実践を大切にしながら、これからも研究に精進していきたい。

各地ラウンドテーブル参加報告(その1)

～早稲田大学ラウンドテーブル参加報告～

福井大学連合教職大学院 特命助教 矢内 琴江

2019年11月9日に早稲田大学で「実践し省察するコミュニティ」が開催されました。福井大学からは、矢内と、授業研究・教職専門性開発コースの服部哲也さんが参加しました。

午前中は、「実践すること・語り合うこと」というテーマでの話題提供がありました。前半は、今年の3月まで早稲田にいてラウンドテーブルの運営に関わっていた私自身が、その経験をふり返り、早稲田のラウンドテーブルが育んでいる大事なこと、またそれが今の自分にどのように活かしているのかを話しました。後半は、卒業生5名が、学生の時のラウンドテーブルや、ゼミでの学びが、いまの自分たちの仕事（教職、広告、銀行など）に、どのように活きて、さらに展開しているのかを話しました。

昼休みの前に、ポスターセッションがありました。学外のフリースクールや、子ども食堂、学内のGSセンター（ジェンダー&セクシュアリティセン

ター）の見学、社会教育実習の経験、ゼミのグループ研究（例えば、ブラック校則の問題や、子どもの自己肯定感など）を発表する学生たちのグループなどが発表していました。

午後は、ラウンドテーブルとなっていました。運営、参加者のほとんどが学生となっており、各グループのファシリテーターも学部生たちが担っています。私のグループでは、学部4年生による、調理実習の模擬授業の自主活動の報告、公民館職員の方による、ひきこもりの大人の人たちの支援事業に関する報告を聴きあいました。

総勢80名前後の参加者で、多くが学生たちであること、運営全体を学部生と院生が協力し合って取り組んでいることなどから、他のラウンドテーブルとはまた違った熱気のなかで、互いの話に丁寧に耳を傾け合う一日でした。

学生が創るコミュニティ

—早稲田教育実践研究フォーラムを通して—

授業研究・教職専門性開発コース3年/福井市中藤小学校 服部 哲也

長期実践研究報告書を執筆する時期が刻々と迫ってくる中、11月9日に行われた早稲田教育実践研究フォーラムに参加させていただいた。私が今回、早

稲田教育実践研究フォーラムに参加させていただいた理由として、長期実践研究報告書を執筆するにあたって今までの取組を県外の人から見たときにどの

ように感じるかを聞いてみたかったからである。また、今までに福井大学と赤塚第二中学校のラウンドテーブルに参加させていただいたことがあるが、さらに新たなラウンドテーブルに参加することでそれぞれのラウンドテーブルのよさを感じてみたいと思ったからである。

早稲田教育実践研究フォーラムでは、実践研究フォーラム、ポスター発表、実践報告会の三本立てだった。早稲田教育実践研究フォーラムはなんと「学生が創るラウンドテーブル」だった。そして、今回の実践研究フォーラムは初の試みで早稲田大学のOB・OGの方々が早稲田大学時代にしてきた研究と今現在働いている仕事での実践とを関連付けながらお話をしてくださり、それらを聴いて、グループで語り合った。その後、ポスター発表があり、最後に実践報告会だった。

実践研究フォーラムにおいて、早稲田教育実践研究フォーラムに6年間携わってきた先生のお話では、「これまで6年間の早稲田教育実践研究フォーラムの経験を振り返り、学生によって企画運営される意義について考えたこと」、教員の方からは「協働することは重要だが、働き方改革によって限られている現状について」、銀行員の方からは「個人のノルマから集団のノルマへと1つのチームとして考えられるようになったことについて」、広告代理店の方からは「協働の枠組みの広さについて」、船で輸入出のお仕事をされている方からは「海外の人との意思疎通、共有、協働していくことの重要性について」、記者の方からは「人の話を聞く姿勢について」などのお話があった。どのOB・OGの方々からもだいたいは「協働」という言葉がキーワードとして出てきていて、社会が「協働」する方向へ向かっている様子が伝わってきた。

ポスター発表では、早稲田大学の学部生がゼミのグループで疑問に思ったことや関心があることなどをもとに、文献を調査し、考察したことをポスターでまとめ、発表していた。ポスターのだいたいは手書きで、とても手作り感があり、工夫している点がたくさん見られた。私はとある2つのポスターの発表を聴いた。「子どもの自己肯定感」「その校則本当に必要？」である。「子どもの自己肯定感」で

は、子どもの育つ環境によって自己肯定感が左右していく話で、私自身もとても興味があるお話だった。「その校則本当に必要？」では、生徒指導提要や実際にアンケート調査したデータをもとに分析していて、とても根拠のあるお話のように感じた。

実践報告会では、私も実践報告者として報告させていただいた。私が発表した内容は「福井大学教職大学院での取り組み」についてである。ここで中心の話題となったのは、「木曜カンファレンスにおける大学版PISAはどの程度の問題を作成し、誰を対象に作成したのか」「大学版PISAで問題作成をしたものは誰かに解いてもらったり、見てもらったりと実証を試みたのか」など大学版PISAに関するお話だった。私が今回、早稲田教育実践研究フォーラムに参加した理由は上記に述べたとおり、「長期実践研究報告書を執筆するにあたって今までの取組を県外の人がどう感じるかを聞くこと」が1つであったが、私たち福井大学教職大学院生の実践は県外の人から見て、講義型の授業ではなく、協働探究型学習をしている姿が不思議に見えて、その探究に関する評価について気になっているように感じた。そして、この独特の取組も私のインターンの取組とともに、長期実践研究報告書を執筆するにあたって残していきたいと思った。早稲田教育実践研究フォーラムに参加した理由のもう1つは、「それぞれのラウンドテーブルのよさを感じてみたいと思ったから」だったが、早稲田教育実践研究フォーラムは学生が運営していることにとても魅力を感じた。毎年学生のニーズに合わせて学生が創っているため、「学生の学生による学生のためのコミュニティ」というような感じである。OB・OGの方々も話しやすい雰囲気、話を盛り上げてくれるため、みんな積極的に話すことができ、私自身もとても楽しく実践を報告することができた。

最後に、早稲田教育実践研究フォーラムでお誘いいただいた矢内先生と、実践報告のサポートをくださった早稲田大学の学生さん、OB・OGの方々、早稲田大学の先生方などお世話になった全ての方に感謝を申し上げたいと思う。本当にありがとうございました！



国際学会参加報告

Sharing on Tokyo, Amsterdam and Malta Conferences 2019

福井大学連合教職大学院 コーディネートリサーチャー Mangulabnan, Pauline

Information dissemination and sharing are some of the ways that educational reform is being known outside one's context. Recently, I participated at the World Education Research Association (WERA) World Congress 2019 held in Tokyo, World Association of Lesson Study (WALS) 2019 Conference organized in Amsterdam, and International Symposium on New Issues in Teacher Education (ISNITE) 2019 hosted by University of Malta. All these three research gatherings focused on international sharing of timely issues and innovative practices to rethink of educational reforms implemented in different parts of the world to share and learn from each other's experiences. In this short report, I write about my experiences in those three conferences.

A common theme of the plenary speeches in WERA is on the importance of reflection by teachers and of schools to give learners a louder voice in the education process. Naing (from Myanmar), Lucia (from Guatemala) and myself presented our research entitled, *Reading through the English Curriculum Frameworks of Cambodia, Guatemala, Japan, Myanmar, and Philippines: A Case Study of Teacher Reflections*. In this presentation, we focused on reflecting upon different curricula on the basis of our own practices in our respective countries and our observations in Fukui classes. Such a research can potentially give teachers voices to: (1) participate in the evaluation of curricula based on practice, and (2) gaining a more reflective stance into ensuring that national goals are part of teacher practices in the classroom. There was also a presentation by Wakasa High School in which they shared how teachers can better listen to student reflections, and use that as an evidence of student learning and as a basis for cultivating community of practice among teachers. Thus, utilizing student outputs as a means of enhancing learning reforms. My attention

was particularly caught by Gert Biesta's words, 'the school is not just a function but also a place between home and the street where we can try, fail, try again... and fail better.' This is connected to the argument of Takashi Nagashima, Masatsugu Murase and Atsushi Tsukui from University of Tokyo in their reflections of some lesson study practices anonymize teachers and students when the value of school reform focuses too much on the process. They proposed, 'to respect the dignity of each and every child, and to appreciate the autonomy and professionalism of teachers.' As teacher educators and researchers, we are accountable to inquiring and respecting individuals and their learning.

The main theme of WALS is 'crafting sustainable pedagogies for teaching and learning'; hence the three-day conference is divided into the (1) craftsmanship needed, (2) sustainable effects, and (3) 'effective' pedagogies utilized in lesson study. University of Fukui DPDT organized a session entitled, *Reflective Lesson Study: Images of Contextualized Practices from Japan to Africa*. Lawrence Sarpong and Thomas Arboh, from Ghana, came to share their present practices on lesson study after their training in Fukui; videos were also sent by Francis Mwesigye (Uganda), Moyo Ganizani (Malawi) and Christopher Nyusala (Malawi). The common themes on the sharing of our African colleagues were: revitalizing lesson study through (a) documentation and reflection, (b) co-inquiry among teachers, (c) students at the center of teacher learning and lesson study, among many others. DPDT was commended by attendees for the innovative co-creation program with African educators. More personally, I was impressed as to how coherent the sharing of our African educators in their collaborative and zealous efforts to incorporate reflective lesson study to improve their country's educational system. In different expressions,

they all agreed that ‘trust and openness’, ‘reflective stance’, and ‘students’ are keys to educational reform. On the last day, I had the privilege to visit Farrell College in Utrecht and the Freudenthal Institute. At the school, our student school guide said that her most favorite thing about her school is student autonomy which is coupled by self-responsibility and self-determination. Freudenthal Institute, on the other hand, engaged us in an experimental lesson study in which observers are in a different room with only video and audio as the main sources of real-time observation data. It was rather a challenge to make sense of the experimental class because we were limited to what the speaker and camera are able to pick up. It was difficult to see students reactions, eye movements, etc., hear students soft remarks and non-verbal cues, and relate one group to the rest of the interactions in the class. I was limited to the spatial movement of students which spoke very little about learning. No matter how technically-advanced the set-up was, I am still convinced that a person’s use of five senses to grasp classroom happenings can never be replaced by technology. Classroom observation and collegial inquiry about the classroom is a way to make invisible things visible; and we need sound evidences to make such interpretations. Hence, lesson study should happen in real-time and real-context with least possible research subjectification.

The main theme of ISNITE is *Teacher Education: Conceptual Debates and Innovative Practices*. This symposium had the most impact on me because of the large number of practice-based, as opposed to theory-driven, researches. The plenaries had the common theme of challenging current teacher education researches to be more grounded on practice, context and culture. University of Malta’s Faculty of Education is revitalizing teacher training to (a) produce reflective, collaborative and lifelong learner teachers, (b) partner with communities and schools in preparing future and in-service teachers, (c) support teachers in their school-based research, among many others which were close to DPDT’s principles. In this conference, Yoshiko Hanbara and myself presented our research entitled, *Designing Models for International Collaborative Inquiry through Reflective Practice Records: Case of a Bhutanese Science Teacher Trainee’s Learning Program in Fukui, Japan*. By following through Ugyen Dorji’s learning and practice records, we were able to

identify the phases (reflecting on his context as he was learning about Japan, facilitating international professional learning community, and acquiring a medium/long-term perspective on school reform) of his learning in DPDT, and his teacher identities (as a school teacher, facilitator, and coordinator) re-discovered in the process. In the end, we proposed that international collaboration means enriching one’s identity and capacity through a rich set of not top-down learning through practice in which everyone is regarded as equal learners; hence, context, culture and professional capacity are crucial in such a design. A school principal shared his more than 10 years of experience in leading school reform in which he says, ‘The key to sustainable reforms in schools is trusting teachers and what they are collegially capable of’. Another teacher shared her ethics class in which students looked at three stories of actual Maltese Muslim women; in her class, students had the nonthreatening freedom to give their own multicultural interpretations of the stories while connecting it to their own experiences. The last keynote speaker from Finland brought with him a teacher who shared her own classroom. When she was asked if students and parents can tell teachers how they feel about what is not working in class, the Finnish teacher replied, ‘Of course! Why not! Then, we can improve the class together.’ ISNITE, by far, is the most practice-driven international conference that I have attended.

In these three conferences, I presented my personal research interest on the role of systematic and strategic documentation in (a) supporting sustainability of school-based and practice-based teacher inquiry and learning, (b) creating and mobilization of knowledge from practice, and (c) balancing teacher collaboration and teacher individual identities in cultivating collaborative professionalism. I shared different results from different stages of my multi-wave iterative research in which I localized reflective practice records and reflective lesson study in the Philippines from analyzing Fuzoku and DPDT practices. One of my original proposals as a result of this study is on the process of knowledge creation and mobilization embedded in practice records writing involves making knowing in action and identity more explicit through reflection that is further extended to habituating through practice and shared inquiry for it to be transferable.

Conferences act as reunions for old colleagues, a chance to create new networks, a venue for different

generations to connect, and an opportunity to learn about initiatives in other contexts. It is when mere listening, coupled by reflection and contextualization, is equated to learning. More importantly, it makes me revisit my own context and practices as I hear others. Instead of comparing and being judgmental of how

others are doing their researches, it helps me revisit my own mental models and my own ladder of inference so that I can unbiasedly listen and learn from others. It is always a humbling experience to know that I still have a lot more to learn... the world is rather a big one!

LOYOLA JESUIT SECONDARY SCHOOL ENVIRONMENTAL RESEARCH CORNER (LOJSSERC) REPORT ON PARLIAMENT VISIT ON 27/09/2019

ロヨラ ジェスイト 中等学校 Moyo Austine Ganizani

We started off early in the morning at 06:45hrs. We had one stop at Lumbadzi to buy some soft drinks. We proceeded and reached the parliament at 09:00hrs. We were warmly welcomed into the parliament premises.



We waited at the parliament stadium before we were ushered into the parliament chamber to watch the deliberations.



Students seated at the parliament stadium as we were waiting for deliberations at 09:30hrs

We entered the parliament chamber and watched the deliberations for the first one hour before break at 10:30hrs. It was at this time that the first deputy speaker welcomed and introduced Loyola Jesuit Secondary School Students to the honourable house. He then asked the Natural Resources and Climate change committee to meet the students during the break.

We met the parliament committee in room 256, where we had brief round table discussions before we went back into the chamber. The discussions with the committee were very fruitful as the committee assured the students of its support on the LOJSSERC activities. The committee, through the chairperson, Mr, Welani Chilenga, promised to link us to groups and organizations that carry out similar environmental activities, within and outside Malawi. He also promised

to send their representative to come and visit our school in the deal to strengthen our relations. The committee, hence, asked LOJSSERC to be a member of their committee. They assured to involve us in their activities within and outside the country. Mr. Chilenga asked the secretary of the committee to document the response to our concerns and compile a report that will be delivered by the chosen members of the committee to the school. He said this would be done in one week time. All this was in respect of time factor that we were supposed to go back to the chamber at 11:00hrs. Some of the concerns raised were as follows:

- 1) What are the new laws that apply to the environment?
- 2) Is the general public well conversant with the environmental laws
- 3) Are there any declarations and implementation gaps – what should be done to safeguard our environment for sustainable use?
- 4) What laws particularly address issues of right usage of **plastics** and the environment? Are there penalties, charges or obligations?
- 5) Does the stakeholder (individuals & institutions eg manufacturing, construction & importing/exporting companies) comply with the environmental laws? What is the current country wide response situation regarding **plastics** and **law**? And what **more** should be done?



LOJSSERC students seated as they wait for Parliament committee for round table discussions

At 11:00hrs we went back into the chamber. The first deputy speaker, who was chairing the deliberations, had asked to meet the students at 12:35hrs after the parliament rise. And so we had another very fruitful meeting with the Clerck and first deputy speaker of parliament in his office. In her remarks, the Clerck of parliament, Phiona Kalemba, encouraged the students to work hard in everything they do to others as they do to God. She gave the bible reference of Colossians chapter 3 v 23 which says; “**Whatever you do, work at it with all your heart, as though you were working for the Lord and not for men**”. We shall consider this verse to be the LOJSSERC motto.

At 11:00hrs we went back into the chamber. The first deputy speaker, who was chairing the deliberations, had asked to meet the students at 12:35hrs after the parliament rise. And so we had another very fruitful meeting with the Clerck and first deputy speaker of parliament in his office. In her remarks, the Clerck of parliament, Phiona Kalemba, encouraged the students to work hard in everything they do to others as they do to God. She gave the bible reference of Colossians chapter 3 v 23 which says; “Whatever you do, work at it with all your heart, as though you were working for the Lord and not for men”. We shall consider this verse to be the LOJSSERC motto.



Phiona Kalemba – Clerck of Parliament encouraging students; Colossians 3 v 2

The first deputy speaker, Hon. Madalitso Kazombo, was also very happy and encouraged the students to take advantage of the good school to realize their dreams. He emphasized the point that we come from different



Hon. M. Kazombo talking to students.

homes and hence the need to work hard as individuals. He motivated the students by narrating his own life experiences and how he worked hard, and how the prosperity and the zeal to work for others follows.



Students listening to 1st Deputy Speaker.

The chief security officer for the parliament was another man of the day. He motivated students with his interesting background of a soldier in the Malawi defense force. He had fought many wars outside Malawi before his retirement and joining the parliament team. In the parliament, he is responsible for the safety of the

entire parliament premises, safety of the speaker and proper dressing by the speaker, and carrying of the Mace. The mace is the symbol of authority and honour, with which the speaker and members of the house can hold valid deliberations.



Students listening to Chief Security officer for the Malawi National Assembly – Lilongwe

We finally had group photos with the Cleric, first deputy speaker, chief security officer and other members of parliament before considering going home. We went out of the parliament buildings around 13:30hrs. We waited for our bus at the parliament gate up to 17:30hrs as it

was at the garage for service. We started off home at 17:45hrs and reached school campus at 21:00hrs.

We had a wonderful experience, and for that we say many thanks to the head teacher and the entire school administration for their support and guidance.





Group photos with 1st Deputy Speaker (Centre), Clerck of Parliament (Right centre), Hon.

Mtonga (Right last), Team leader (Left centre), Escorting teacher (Left last) & Students.

タイ王国校長等研修報告

～タイ王国校長等研修を振り返って～

2019年10月28日～11月3日、福井大学連合教職大学院と独立行政法人教職員支援機構（NITS）の協働で、タイ国校長研修を実施した。タイ国からは、受講生として校長とトレーナーが34名、その他行政や大学関係者が12名の計46名、日本からは、運営スタッフとして教職員支援機構から大路正浩理事をはじめ10名、福井大学から松木健一副学長をはじめ9名が参加し、10月28日～31日は福井大学二の宮キャンパス（学校訪問は福井大学教育学部附属義務教育学校、福井市至民中学校）、11月2日～3日はつくば中央研修センターで行われた。

タイの子ども達のよりよい成長に向け、校長やトレーナーが、子どもが主役の学校づくりに積極的に取り組むことを目指し、福井では講義、授業参観、授業記録の読み込み、授業研究会参観、学校訪問、つくばではスクールプランの作成とその実現に向けたアクションプランの作成、ポスターセッションなど、内容のつながりを重視した研修であった。全日程を通して、受講生達が、受講生同士あるいは日本人スタッ

福井大学連合教職大学院 牧田 菊子

フと互いに交流を深め、自分の勤務する学校をイメージしながら真剣なまなざしで意欲的に学んでいる姿がとても印象的であった。研修内容の詳細は、以下の通りである。

1日目：

- ・開講式
- ・福井大学副学長 松木健一氏による講義「教育動向」
- ・教職員支援機構 宮迫隆浩氏による講義「問題解決型授業の構成Ⅰ」

2日目：

- ・福井市安居中学校校長 牧田秀昭氏（前福井大学附属義務教育学校副校長）による講義「授業研究を核とした学校経営」
- ・附属義務教育学校授業参観
2年生 社会創生プロジェクト（授業者：川崎先生、解説者：五十嵐先生）

4年生 社会創生プロジェクト(授業者:岩本先生、
解説者:皆川副校長)

7年生 数学科 (授業者:柳本先生、
解説者:牧田前副校長)

- ・附属義務教育学校授業参観の振り返りと質疑応答
(コメント:柳研究主任、牧田前副校長、柳本先生)
- ・教職員支援機構 宮迫隆浩氏による講義「問題解決
型授業の構成Ⅱ」

3日目:

- ・授業記録「スズメノカタビラ」の読み込み(各自)
- ・授業記録「スズメノカタビラ」の内容について協議
(グループ)
- ・福井市森田中学校教頭 竹澤宏保氏(授業記録「ス
ズメノカタビラ」執筆者)による講義「授業記録の
意味～スズメノカタビラの探究を通して～」
- ・附属義務教育学校研究主任 柳博恵氏による解説
「教育課程研究会について」
- ・附属義務教育学校教育課程研究会参観(国語科、社
会科、数学科、理科、英語科)と参観の振り返り

4日目:

- ・福井市至民中学校(教科センター方式)訪問
○校舎見学
○数学・英語エリアでの授業参観・参加 数学科
(2,3年) 英語科(1,2,3年)



○福井市至民中学校長 小林真由美氏による講義
「地域との連携について」

サポート至民(地域住民ボランティア)メンバーに
よるコメント

- ・福井大学連合教職大学院教授 淵本幸嗣氏(元福井
市至民中学校長)による講義「実践、省察、記録に
よる学校づくり～協働による同僚性の構築～」
「VUCA(ブーカ)の時代を生き抜く学習する組織」

5日目: 移動日 福井県福井市→茨城県つくば市

6日目:

- ・福井大学連合教職大学院教授 三田村彰氏による演
習「スクールプラン作成」
- ・スクールプランの発表、質疑応答

7日目:

- ・福井大学連合教職大学院教授 三田村彰氏による演
習「レッスン・スタディをキーワードにしたアクシ
ョンプランの作成」
- ・アクションプランを用いてのポスターセッション
- ・閉講式

研修の終盤で、受講生が自ら作成したスクールプ
ランを、グループのメンバーに対し自分の学校の
教員だと思ってプレゼンする場面があった。笑顔
で自身のプランを語る校長先生、それに対して教
員役の他のメンバーが質問を投げかける。そのや
りとりの中で個人が作ったプランが練られ共有さ
れていく。皆の表情からは、どんどん夢が広がり楽
しくなってきた感じで、仲間意識とやる気の高ま
りが読み取れた。ある校長先生からは「早くタイの
自分の学校に戻り、子ども達に会いたくなってい
く」という声が上がった。このような受講生達の姿
は、まさに子ども達のアクティブ・ラーニングの姿
と同じであると感じた。

ある受講生は、「教員の育成に向け、日本からも
らったイノベーションを校長として教員に伝え、
なぜ今までの教育を変えないといけないかを共有
したい。そして教員が授業に対する考えを変える
ことを期待したい。カリキュラムのデザインは、他
の人も参加して共に構築することを推進したい。
もっともっと授業研究を行いたい。授業は、他の授
業とどのように関わっているかを考えて工夫した
い。そして、学校と地域がどのように関わるか、子
どもがどのように社会貢献できるかを皆で考えた
い。また、子どもが自分の学びの跡を展示するこ
とを、教員が課題を与えて行うのではなく子どもが自
分で考えて行うようにしたい。」と語っていた。

子どもの学びを変えるには、大人の学びを変え
なければならない。カリキュラム・マネジメントを
行い、仲間と共に授業研究を行い、実践記録を書き
続けていく学校こそが、これからを生きる子ども
達を育てる学校である。このことを今回のタイ国
校長等研修で私自身、改めて学ぶことができた。子
ども達の幸せと可能性を拓いていく教職というす
ばらしい仕事についていることの意味を皆で共有
し、今後もわくわくドキドキ楽しみながら励んで

いきたい。その仲間が国境を越えていることを再確認できたことは今回の研修の大きな収穫であった。研修に参加されたタイ国の皆様の温かい笑顔が、今も鮮やかに心に残っている。



各地公開研究会案内

学 校 長 様
教育関係所属長 様
参 加 希 望 者 様

令和元年12月

長 野 県 伊 那 市 教 育 委 員 会
長野県伊那市立伊那小学校長 林 武 司

公開学習指導研究会のご案内

＜総合学習・総合活動の中核にした教育課程＞

「内から育つ」

— 自分の問いをもって追究し、学びを深めていく子ども —

本校の公開学習指導研究会も、本年度で41回目を迎えます。これまでご参加いただきご教示くださいました皆様に、心より御礼申し上げます。

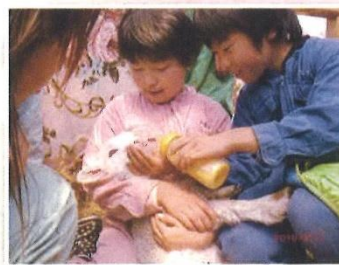
私たちは「子どもは自ら求め、自ら決め出し、自ら動き出す力をもっている存在である」という子ども観に立ち、子どもたちの求めや願いから学習を展開していくことで、子ども自身に学ぶ力が育ち、主体的な学習が創造できると考えます。そこで、本校では総合学習・総合活動の中核に据えた教育課程を編成し、子どもと共に創り出す授業を実現しようと研究実践を積み重ねています。

本年度は、研究サブテーマを「自分の問いをもって追究し、学びを深めていく子ども」と定め、一人一人の子どもが対象と向き合い、友とのかかわりや自分自身を見つめることから自らに問いかけ、その子らしく学んでいく姿をとらえ「内から育つ」子どもに迫りたいと研究を続けてきました。

本研究会は、本校の子どもの具体の姿や学習指導の実際から、皆様方と共に、教育のあり方を探っていくことを目的とするものです。

多くの皆様方のご参加ならびにご教示をお願い申し上げます。

なお、子どもたちの成長の過程を見ることで、子どもたちの育ちをとらえたいと考え、竜北保育園・伊那西小学校・伊那中学校を同時に公開いたします。



＜ミルクを飲んでくれるかな＞

1 主 催 長野県伊那市教育委員会
長野県伊那市立伊那小学校

2 期 日 令和2年2月1日(出)

3 会 場 伊那市立伊那小学校

4 日 程

7:40 8:35		9:20 9:40 9:55		10:30 10:45		11:30		12:25		1:50 2:05		2:35 2:45		4:15	
受 付	自由参観 (全学級公開)	授業者との懇談	移	開 会 行 事	研 究 発 表	移	共同参観	昼 食	(分科会) 研究協議	移	学習発表	休 憩	講 演 会		
			動		動					動					
		9:20													

※受付時間は午前7時40分～9時30分です。それまでに受付を済ませますようご協力ください。

令和元年度 学習研究発表会のご案内

個の学びを支え、つなげる「奈良の学習法」 ～単元の本質を見極めて、個の学び・共同の学びをつくる～



私たちは子どもを中心に据えて、「奈良の学習法」を継承し、現在までその命脈を保ち続けてきました。次代を切り拓く教育の理念がここにあると確信しているからです。

今年度、子どもの学び合いの質的な深まりにこだわって研究を進めました。共同の学びの質を高めるためには、個の学習能力を育てることが不可欠だと考えています。「それぞれの単元で、子どもにどのような能力を育むのか」を明確にして、一人ひとりの子どもの追究を活性化し、それらをつなぎながら学び合い、多様な能力や個性的な才能を引き出すことを目指します。

そこで、本年度の研究主題を「個の学習能力を育てる『奈良の学習法』」とし、単元の本質をどのように捉え、個の学習能力をいかに育むかを明らかにしていきたいと考えました。

来る学習研究発表会では、子どもの具体的な学びの姿を公開するとともに、それらをもとに皆様とご議論を重ねて、ご意見ご高評を賜ることができれば幸いです。ここにご案内申し上げますとともに、多くの皆様のご参会をお待ちしております。

期日 令和2年2月7日(金)・8日(土)

会場 奈良女子大学附属小学校

〒631-0024 奈良市百楽園1丁目7-28

Tel:0742-45-4455～6

ホームページアドレス <http://www.nara-wu.ac.jp/fusyo/Welcome-jp.html>

主催/奈良女子大学附属小学校 学習研究会

実践し 省察する コミュニティ

Round Tables:
Spring Sessions 2020
for Reflective Practice
and Organizational Learning
in University of Fukui

For Communities of Practice and Reflection, since 2001

The 20th anniversary year of Round Table Cross Session in University of Fukui

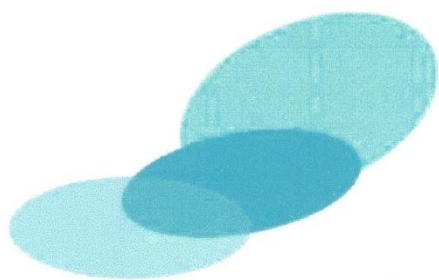
実践研究 福井ラウンドテーブル

2020 spring sessions

15(sat) 13:00-17:40

16(sun) 8:20-14:00

福井大学総合研究棟V（教育系1号館）総合研究棟



探究する学びを実現する教師
教師を支える教職大学院
教師の実践力を培う学校拠点の実践研究

学校と大学/
実践と研究を結ぶ
新しい実践研究組織とそのネットワーク

2020.2.15-16

教師教育改革コラボレーション/福井大学連合教職大学院

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科

共催 社会教育実践研究フォーラム

後援 福井県教育委員会・福井観光コンベンションビューロー

実践研究 福井ラウンドテーブル 2020 spring sessions

The 20th anniversary year of Round Table Cross Session
in University of Fukui since 2001

2/15(sat) 13:00-17:40

orientation 13:00-13:10 学校・教育・地域を考える4つのアプローチ

- A 学校:21 世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う
対話を編み込み、実践をデザインし、文化を創り出す
- B 教師 ①働き方改革と学び合う学校づくり:組織・コミュニティ・カリキュラムのマネジメント
②専門職としての学びのプロセス:対人援助職のための省察的実践の場を組織する
- C コミュニティ:持続可能なコミュニティをコーディネートする
地域のこれからを拓く担い手をいかに育てるか
- D 授業研究:子どもと教師の学びを支えるために授業研究・保育研究をいかに組織するか

session I 13:10-14:10 実践に学び合う広場 実践の広がりに出会う **knowledge fair**

session II 14:20-15:50 課題の提起 方向性を探る **symposiums**

session III 16:00-17:40 テーマ別の話し合い 問いを深める **forums**

2/16(sun) 8:20-14:00

SessionIV Round Table Cross Sessions

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

①はじめに 8:30-8:40 ②自己紹介 8:40-9:00 ③報告Ⅰ 9:00-10:40 ④報告Ⅱ 10:40-11:40 ⑤報告Ⅲ 12:20-14:00

地域や職場で自分たちの実践をじっくり跡づけ、その省察をふまえて実践を編み直していく。地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体（コミュニティ）に変えていく。その中で一人一人が、省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少しずつ蓄積されてきています。

試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを、より広く伝え合い、じっくり展開を聞き取り、学び合う場を作りたいと思います。

小グループで実践の展開を聴き合います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていききたいと思います。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々を感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていききたいと思います。実践の過程をじっくり語り・聞きあう場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

- 参加申し込みが必要です。以下 URL 申込フォームからお願いいたします。

<https://goo.gl/forms/M1pFwu3kmn1ulbEI3>

- 2/16 の sessionIV の実践報告者を募集しています。申し込みの際にお知らせ下さい。

- 2/16 の sessionIV の参加についてのお願い＝午前午後全日程（8:20-14:00）の参加をお願いします。ラウンドテーブルでは少人数で互いの実践の長い展開を聴き合い、考え合うことを目的としています。そのため 8:20-14:00 の全日程を 6 人程度の固定メンバーの小グループでの協働探究として進めます。原則として 8:20-14:00 の全日程に参加できるメンバーで進めますので、よろしくお願いいたします。

プログラムの変更等があり得ます。

最新の情報を福井大学連合教職大学院ホームページ <http://www.fu-edu.net/> をご確認ください。

実践研究福井ラウンドテーブル spring sessions 2020.2.15-16



福井大学連合教職大学院 入試説明会

令和2年

1/11

土 13:00-

教職開発専攻

授業研究・教職専門性開発コース
ミドルリーダー養成コース
学校改革マネジメントコース

**福井大学文京キャンパス
アカデミーホール 集会室**

13:00からの全体説明のあと、
概ね14:00から個別相談となります。

●過去問を
閲覧できます！

●募集要項を
入手できます！




出願を考えている方、関心のある方は、
お気軽にご連絡ください。

福井大学学務部入試課

TEL 0776-27-9927
E-Mail g-nyusi@ad.u-fukui.ac.jp

※氏名・電話番号・所属、志望コースをお知らせ下さい。

学生募集日程

令和2年度第2回

出願期間：令和2年1月24日（金）～30日（木）
試験日：令和2年2月8日（土）
合格発表：令和2年2月17日（月）



**教員免許取得
プログラム**

授業研究・教職専門性開発コースの入学で、教職に
対して強い意欲を持った者に、小学校、中学校、高等学
校（公民、工芸、書道、保健体育、保健、家庭は、取得
出来ません。）又は特別支援学校の教育免許取得の道を
拓くものです。

授業料は、通常の2年分の授業料を3年間で分割納入
することになります。



創造力、実践力。
国立大学法人
福井大学
UNIVERSITY OF FUKUI

福井大学大学院・連合教職大学院 〒910-8507福井県福井市文京3-9-1 TEL.0776-23-0500（代表）

Schedule

- | | |
|---|-------------------|
| 1/27 Mon 長期実践研究報告提出〆切 | 2/2 Sun 長期実践研究報告会 |
| 2/2 Sun 第2回大学院入試ガイダンス | 2/8 Sat 第2回大学院入試 |
| 2/15 Sat - 2/16 Sun ラウンドテーブル 2020 Spring Sessions | |

【編集後記】

2019 年が終わろうとしています。みなさんにとって、今年はどうな年だったのでしょうか。令和最初の年末年始ということもあり、テレビでは何かと新しいことが多かった今年の出来事をふり返るといった内容の番組をやっていました。皆さんにとっては、どんなスタートがありましたでしょうか。令和最初の冬の集中、いよいよスタートです。（N）

教職大学院 Newsletter No.128

2019.12.25 内報版発行
2020.1.21 公開版発行

編集・発行・印刷
福井大学大学院 福井大学・
奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学
連合教職開発研究科
教職大学院 Newsletter 編集委員会
〒910-8507 福井市文京 3-9-1
dpdftfukui@yahoo.co.jp